

飲水思源

町長 松岡市郎

出会いの場、フォトフェスタと写真甲子園

写真の町を宣言し、フォトフェスタは25回目、写真甲子園は16回目を迎えた。日ごろ、「どうして東川町は写真の町なのか」とよく聞かれる。その度に「旭岳を中心とした大雪山の山並み、四季の変化など、写真の被写体としても素晴らしい自然がある。次代を担う子供たちにカメラのレンズを向けられても正々堂々とポーズが取れるよう健やかに暮らし、そして子供たちを育成したい。施設は写真映りの良いものを目指し、人々との出会いによる活力のあるまちづくりを図りたい」と私は言ってきた。

フォトフェスタは、日本写真協会、日本写真家協会、日本写真広告協会、日本写真文化協会、日本写真家連盟、東京都写真美術館など、写真関係団体の方々からご支援をいただけるようになった。また東京ビッグサイトで開かれた日本写真映像用品工業会など業界イベントでは、東川町特設ブース開設のご支援もいただいている。これも25年間にわたる町民と写真関係者の出会いのたまものだと感じる。

写真甲子園も15周年を迎えた。今

年の応募高校数は331校と過去最高、今年から本戦出場高校も4校増え18校となった。美瑛町、上富良野町に加え、新たに旭川市と東神楽町も写真甲子園実行委員会に加わっていただいた。イベントの広域連携の一つでもある。

写真甲子園開会式での選手たちの出会いは、厳しい選考審査を経ての「実力の出会い」であり、選手や監督は、ローカルな人々や文化、そして自然との出会いで「出会いは絶景」となることであろう。また閉会式の場合はまさに「出会いは感動」となり、私たちにとつても感動と感激の瞬間がやって来る。

この写真イベントのおかげで、新聞やTVなどで東川町がよく紹介される。「新聞に出ていたよ。TV見たいよ」などの言葉が寄せられる。共通していることは、人と人との出会いによって支えられているのだ。出会いは大切にしなければならぬ。今年の写真イベントには多くの人々の来町が予定されていると聞く。どのような感動の出会いとなるのか。考えるときドキする。

(7月22日記)

短歌

給付金で千島桜を買いぬ冥途の父母へのみやげ話に
 昏みゆく丘のかたちをなぞらへば思ひいたりし母の乳房よ
 郭公も蟬の時雨も声たえて六月の日々を暮れる蝦夷梅雨
 田植え終え久に静もる水張田よかわすの声聞きしばしまどろむ
 肌寒く花もふるえし水無月もせかずゆるりと夏は来にけり
 すんすんと色とりどりのルピナスの花咲き香り腰のばし見る
 蝦夷梅雨かりら冷えか知ら六月は今日も雨降り悩みてをりぬ
 毎日の歩みと共に今日ひと日あすの平和を願いて生きむ
 澄み渡る空を眺めて飛行機が雲に隠れて見えなくなるまで
 足腰の痛みも老いと受けとめる拙なき趣味に心しずめて

松倉和子
 宮坂敬子
 矢沢ますえ
 中田治子
 嶋崎ミエ
 永江栄子
 岡澤チズ子
 清水チヨ
 笹田富士子
 瓜生昭枝

俳句

肩の荷を下ろして古希の夕涼み
 仰ぐ虹顔のなみだかわくまで
 この森になにが棲むやら夏の鬨
 人気なき砲台跡の螢火よ
 万緑や旧邸跡に見る栄華
 一日終え我に戻らむ宵涼み
 草臥て休らふ庭に納涼けり
 水の面を打って納涼の極まれり
 庭の木に返す風あり夕涼み
 木陰ごと涼みて手作りパン屋まで
 納涼船女かしまし揺れやまず
 納涼の風まで届く見舞文
 野良帰り煙管で一ぶく涼み台

石澤清宏
 澤田久美子
 松山蓉子
 三島智
 長谷川きみゑ
 小林露葉
 青野公花
 宮坂紫雲
 杉山ひろのり
 徳光吐苦
 杉山りつ
 山口佐知子
 高瀬潤